

# 【課題4】

柳河を南に約半里ほど隔てて六騎の街沖ノ端がある。十六騎とはこの街に住む漁夫の諺名であつて、昔平家没落の砌に打ち洩らされ六騎がここへ落ちて来て初めて漁りに従事したといふ、而してその子孫が世々その業を繼襲し、繁殖して今日の部落を爲すに至つたのである。十畢竟は柳河の一部と見做すべきも、海に近いただけ凡ての習俗もより多く南國的な、怠惰けた規律のない何となく投げやりなところがある。さうしてかの柳河のただ外面に取すまして廢れた面紗のかげに淫らな秘密を匿してゐるのに比ぶれば、凡てが露で、元氣で、また華やかである。かの巡禮の行樂、虎刺拉避けの花火、さては古めかしい水祭の行事などおほかたこの街特殊のものであつて、張のつよい言葉つきも淫らに、ことにこの街のわかい六騎は温ければ漁り、風の吹く日は遊び、雨には寝ね、空腹くなれば食ひ、酒をのみては月琴を弾き、夜はただ女を抱くといふ風である。かうして宗教を遊樂に結びつけ、遊樂のなかに微かに一味の哀感を繼いでゐる。觀世音は永久にうらわかい町の處女に依て齋がれ、各の町に一體づつの觀世音を祭る、物日にはそれぞれある店の一部を借りて開帳し、これに待つくわかい娘たちは參詣の人にくる豆を配り、或は小屋をかけていろいろの催をする。さうしてこの中の資格は處女に限られ、縁づいたものは籍を除かれ、新しい妙齡のものが代つて入る。十天火のふる祭の晩の神前に幾つとなくかかぐる牡丹に唐獅子の大提燈は、またわかい六騎の逞ましい日に焼けた腕に獻げられ、霜月親鸞上人の御正忌となれば七日夜の法要は寺々の鐘鳴りわたり、朝の御講に詣づるとしては、わかい男女夜明まへの街の溝石をからころと踏み鳴らしながら、御正忌參らんかん………の淫らな小歌に浮かれてあいびき

沖ノ端の寫眞を見る人は柳、梅檀、柘榴、櫨などのかげに、而も街の眞中を人工的水路の、一種のある異國的情緒の微漾を感じるであらう。あの水祭はここで催され藍玉の俵を載せ、或は葡萄酒の酒袋を香の滴るばかり積みかさねた小舟は毎日ここを上下する。正面の白壁はわが叔父の新宅であつて、高い酒倉は薨の上部を現はすのみ。かうして、私の母家はこの水の右折して、終に二條の大きな樋に極まり、渦を卷いて鹹川に落ちてゆくその袂から、是に左したるところにある。